

# 住まいは幸せに暮らすためにあるのです。

# 暮らしのここ3

住まいづくりの目的が変わった現在。

生活者であるエンドユーザーは住まいに何を望んでいるのだろう。

我々が考えるその答えは「幸せな暮らし」。

価値観が多様化した現在で尚且つ定義が曖昧な顧客の幸せ感とはどのようなものなのか。

そこでターゲットとする顧客のニーズや想いを探り、

選ばれる住宅会社になるための住まいづくりを一緒に考えていきましょう。

新シリーズ

## 「住宅建築家として」

建築の設計をやり始めてかれこれ30年が経つ。病院からマンション、工場、公民館などの一般建築の設計から、商業施設、温浴施設など様々な建物の設計をしてきた。

若いころは大規模な建築の設計をする建築家を目指していたが、ある時期から住宅というものに非常に興味を抱き始めた。

住宅では人が育ち、人が死に、人が暮らす。人生の大半を過ごす場所でもある。

泣いて笑って、たまには落ち込んで、自分や他人に怒り、何かに感動し、そして幸せを感じる場所。

住宅とはそれほど重要な建物なのだと分かり、意識して住宅とはなんぞやと研究、勉強、試行錯誤しはじめたのはいつごろだっただろう。

その昔、ある著名な建築家が設計に携わる人のことを次のように分類していた。

### 「設計屋」

建築の設計を行う職人であり技術者ではなく技能者

### 「設計士」

法律の内容に沿って建築の設計を行う技術士

### 「建築家」

芸術家のように何かを極め、文化創造に寄与する大家



「ドラマ「結婚できない男」の中で出てくる建築家」

このように分類して考えると確かに世の中に存在する一級建築士や二級建築士にはそれぞれの特徴がある。

資格自体は試験に合格すれば取得できるが、運転免許証と同様に免許を持っているからといって誰もがサーキットを高速で走れるわけではない。

これは弁護士や医師も同じだと思うし、他の士業免許取得者と同じなのだろうと思う。

建築士の分野で言えば、デザインを中心に設計をする「意匠設計」、構造計算を主体とする「構造設計」、電気や設備の設計をする「設備設計」、外構やランドスケープのデザインや設計を行う「外構設計」などに分けられる。

建築士といわれる職種でもこれだけ専門性が必要なのである。

それに加えて「社会構成」や「人類科学」など建築を通じて社会のことや人類のことを考える役割の設計者が必要になってくる。

その役割こそ「建築家」といわれる職種の人なのではないかと考えている。

自分の経験をベースに考えると、若いころはがむしゃらに建築そのものを勉強してきた。

設計事務所で建物の用途にそった動線計画や必要所室の配置、採用する建築材料の特徴や工法、JIS規格や関連法規の習得、建築の流れや施工方法、施工手順などなど。

ある時期から実際の施工を学びたくなり、その当時流行りつつあったCM(Construction Management)の手法や考え方も体験した。

その後、住宅の奥深さや社会に対する影響の大きさを感じ始めたころから、建築そのもの以上に、社会に与える影響や住宅で暮らす人たちの生活について研究するようになった。

住宅はその地域の気候風土に影響を受ける。

またその風土や慣習を形成しているひとつが住宅でもある。

日本に限らず世界中の住宅がそうである。

寒いシベリア地域の住宅や、石の文化を持つ地域の住宅、亜熱帯地域の住宅などなど、気候や産出される建材によっても住宅のありようが変わる。

国土が狭い日本では南北にながい地形と、太平洋に面していることによる気候の変化によって、それぞれの地域ごとに住まいのつくり方や生活の習慣や地域の慣習に違いがある。

長い歴史の中での民族的な違いもあるのかもしれない。

いずれにしても住宅というものを考えるとき、構造や工法、建築材料や住宅設備だけではなく、その地域やそこで暮らす人たちの暮らしをベースとして設計しなければならない。

暮らしは社会生活や社会構造に大きく影響され、また大きく影響を与える。そんなところまで考えながら住宅を設計する役割こそ、住宅建築家と呼ばれる職種なのではないだろうか。

自分もそろそろ住宅建築家を名乗ろうと思っている。それは、それだけの知識や経験が備わったというわけではなく、住宅建築家という役割を担いたいという希望があるからである。

次号から、住宅建築家として、住宅を設計するときに押さえておきたい事項を考えていきたいと思う。

住宅建築家 田中心吾